



難波宮の大極殿の一部が原寸大に復元されている、大阪歴史博物館「古代のフロア(10階)」

を費やして、田畑や村落に変貌してしまった宮跡の土地を少しずつ買い戻していったんです。

桜花 それで現在の美しく整備された宮跡を見ることができるんですね。

文化で描く新たな広域地域像

桜花 平城遷都をはさんで前期難波宮と後期難波宮がありますが、どうしてそのようなことが行われたのでしょうか。

脇田 奈良時代は、宮殿とはいえ掘立柱に草葺きや板葺き屋根の建物でした。だから新しく建て替えたり天皇が代替わりしたりするのを機に、都ごと移してしまっただけかもしれませんね。平城京で天皇が7代続いたのは、それまでなかったことです。

堀井 平城京へ移って再び難波宮へ戻ってきたのは、藤原一族の影響から一時逃れるためだったという説を聞いたことがあります。聖武天皇は奈良の大仏を作る前に、恭仁京(くにきょう:現在の京都府木津川市)など、たびたび遷都をしています。

脇田 そうです。また、堺市の仁徳天皇陵や高槻市の継体天皇陵のように、奈良時代の天皇の御陵というのは、どういふわけか大阪府内に集中しています。大阪は、奈良時代から朝廷と密接な関係にあるんです。

桜花 継体天皇といえば、毎年10月に福井県越前市にある『たけふ菊人形』の会場で継体天皇をテーマにしたミュージカルも上演させていただいたことがあります。

脇田 継体天皇は、即位して大和に都を定めるまでは、越前地方におられましたからね。

堀井 そういう意味では、先ほども申しましたように、大阪や奈良といった行政区域にはとらわれない文化的な国土軸を描いてみると、日本人の文化や伝統の成り立ちが見えてくるように思います。これからの日本はハード系の国土整備だけではなく、文化という広域的な視点で国づくりを考えてみることも重要かと思います。

脇田 そうですね。畿内では、流通も文化もひとまとめにして考えたほうがいいでしょう。かつて日本海からの物資は敦賀や小浜で揚がり、琵琶湖を通過して京都や大阪に入りました。例えば鯖寿司(なれ寿司)が京都の食文化だと言われるのは、敦賀で作ったひと塩物の鯖寿司が、京都への

輸送中にちょうど良い加減に“熟(な)れ”たからだといわれています。また、敦賀から大阪まで下関回りの直行便ができると、北陸のさまざまな物や文化が瀬戸内海経由で大阪に入ってきました。

堀井 越前、畿内、瀬戸内をつなぐ大きな輪の物流ルートになっていたんですね。

脇田 例えば平安時代に江口という遊里(現在の大阪市東淀川区江口橋あたり)ができたのも、そういうつながりからです。江戸時代になると、井原西鶴が近江や大和から難波に出てきて成功する者の話を書いています。

堀井 近松門左衛門は、難波から大和へ男女が逃避行する人形浄瑠璃『冥途の飛脚』を書いています。

脇田 遊女梅川と忠兵衛が手に手をとって新口村(現在の奈良県橿原市)へ逃げる話ですね。近松門左衛門という人は、観客の出身地を考えて芝居を作っていました。ストーリーに親近感をもってもらえるように、土地のつながりをちゃんとつけている。だから面白いし、多くの人に受け入れられた。

堀井 なるほど、そうだったんですか。『冥途の飛脚』は冬の話ですが、昨今は都会から文化的な季節感もなくなってきているような気がします。脇田先生が四季折々の



難波宮跡からの出土品を展示(大阪歴史博物館「古代のフロア」)



難波宮跡の発見者・山根徳太郎教授の足跡を紹介(大阪歴史博物館「古代のフロア」)